

## 脆弱性の発現メカニズム —タイ津波被災地にみるビルマ人労働者の事例—

47-56847 乙黒聡子

キーワード：脆弱性、人間の安全保障、津波、ビルマ人、移民労働者、タイ

### 1. 問題意識

今日の国際社会において、「人間の安全保障」を希求する声が高まっている。これは、「貧困」という一時的な状態のみならず、リスクによる変動を含めた人々のもつ「脆弱性」に目を向けたアプローチであり<sup>1</sup>、人々が直面する多様な脅威により人間の安全が損なわれないための指針である。

現状において、人間の安全保障の基本理念を達成するための戦略として位置づけられているのは、「保護」と「能力強化」である<sup>2</sup>。これにより、トップダウンとボトムアップの両方向からのアプローチの必要性を指摘している。しかしながら、この戦略の有効性については議論の余地があり、論拠の曖昧さについても否めない。

では、人間の安全保障を損なう危険にさらされている人々、すなわち「脆弱な人々」は、脅威に直面した際どのような状況に陥ることによって脆弱さを露呈するのか。これを明らかにすることは、人々の脆弱性の低減という「人間の安全保障」の概念にもとづいた現実的な取り組みでの「具現化」において大きな役割を担う。

### 2. 研究目的と本研究の位置づけ

そこで本研究では、人間の安全保障における「脆弱性」の視点から、「脆弱な人々が脅威に直面した際どのような状況におかれるのか」という点について具体的に明らかにすることを目的とする。

本研究の意義として、第1に、人間の安全保障の概念を事例により検証することで、具体的な問題の構造を明確化し、問題への対応の方向性や解決の糸口を模索する新たな機会を提供する。第2に、「脆弱性」という動的な概念で人々の生活を考えることで、従来の静的な概念であった貧困削減の方向性を補完することが可能である。

### 3. 事例調査：タイの移民労働者のもつ脆弱性

#### 3.1 研究のアプローチ

タイのビルマ人<sup>3</sup>労働者問題を事例として取り上げる。この事例として取り上げる意義として、タイでは過去10年間に、1997年にアジア経済危機、2004年にはスマトラ沖地震による津波災害という大きな脅威に2度もさらされてきた。それに対し、国家は困難に直面した人々を守ることができず、それまで高度に経済成長を遂げていたタイ社会の負の側面を浮き彫りにした。

そこで、津波災害時に露呈したミャンマーからの移民労働者の脆弱性について事例として取り上げ、経済成長や貧困といった観点からは評価されてこなかった社会の問題に光をあてる。

事例調査は、文献調査とインタビュー調査にもとづき実施した。まず文献調査を通じ、タイにおけるミャンマーからの移民労働者と彼らを取り巻く状況について俯瞰した。その後、実際にタイ南部の津波被災地において生活するビルマ人労働者に対して行ったインタビュー調査にもとづき、津波被災前後の変化の状態から、彼らが直面する現状とその脆弱性について言及した。

#### 3.2 インタビュー調査概要と調査結果

津波被災地であるタイ南部6県のうち、ビルマ人労働者の被害が大きかったパンガー県を調査対象として選定した。津波被害のあった県内沿岸域3地点(A-C地点)で活動する支援団体と、ビルマ人労働者を対象にインタビュー調査を行った。インタビュー調査の概要について、表1に示す。

結果から、いずれの被災者も政府機関等による公的な支援をほとんど受けていない状況におかれて、被災直後にはほぼ一様に脆弱さを露呈していた。しかしながら、被災後半年から1年半後の長期的な状況では、被災以前よりも生活の状況が悪化している人とそうでない人がおり、状況に違い

<sup>1</sup> Chambers 1989, p. 1.

<sup>2</sup> Commission on Human Security. 2003.

<sup>3</sup> 正式には「ミャンマー人」だが、彼らを支援する団体の多くが「ビルマ」という表現を用いるため、本研究ではこれに従い、便宜的に「ビルマ」と表記し、ミャンマーと同義として用いる。

表1 インタビュー調査概要

		A地点	B地点	C地点
インタビュー回答者	男	4人(2人)	2人(2人)	4人(2人)
	女	3人(1人)	4人(3人)	5人(2人)
各地点の母集団		約200人	約600人	約100人 (20人程度の 小規模集落 が点在)
職業的特性		漁業従事者 中心(加工 業を含む)	漁業従事者 中心(加工 業を含む)	建設現場の 日雇い労働 者中心

※1 英語-ビルマ語, 英語-タイ語-ビルマ語の通訳を介して実施。  
※2 調査期間は, 2006年9月7日-16日の計10日間。  
※3 表中( )内の数字はインタビュー回答者のうちの被災者数。

が生じていることが明らかとなった。このことから、たとえ脆弱であるとされる移民労働者であったとしても、その後の長期的な対応においては、何らかの差が生じることがうかがえる。

#### 4. 考察：脆弱性発現のメカニズム

##### 4.1 「状況の変化」脆弱性発現のパターン

被災直後には一様に脆弱性を露呈したビルマ人労働者は、時間の経過にともない状況に変化がみられた。主に変化した状況は「住居・職業・経済(家計)・健康・社会的権利」の5つの側面である。これらの変化が、ビルマ人労働者らの生活にどのように影響を及ぼすかについては、「現在」と「将来」という2つの視点から考えられる。

前者は、単純に津波によってもたらされた変化そのものが現時点でのビルマ人労働者の生活の状態を改善もしくは悪化させたか、という視点である。他方、後者は、津波によってもたらされた変化が、将来の生活に対してどのような効果があるのか、という視点である。つまり、現時点での生活の状態改善に貢献するような変化が、将来的にも生活の状態に改善をもたらすような変化であるのか、それともその効果は一時的なもので、将来の生活には特に寄与しない、あるいは損なう恐れすらもつ変化ではないか、という視点である。

この違いについて津波被災後の長期的状況の変化をもとに、脆弱性の発現パターンという視点から、①「現在の生活」が悪化する、②「現在の生活」は改善されたが、一時的な効果であり「将来の生活」には影響を及ぼさないか悪化させるような可能性がある、③②と同様に「現在の生活」は改善され、さらに「将来の生活」をも改善する可能性がある、という3つに分類することが可能である。この分類を図式化したものを、表2に示す。

①は現在の時点で悪化しているため望ましいとはいえない。②と③の状態を比較し、現在だけでなく「将来の生活」においても改善傾向に向かう

可能性をもつ③の方が、脆弱性の発現の回避という観点からはより望ましいといえる。

表2 脆弱性発現のパターン

		将来の生活【脆弱性】	
		悪化	改善
現在の生活	悪化	①状況の悪化	
【厚生水準】	改善	②表層の問題の解決	③根本的問題の解決

#### 4.2 脆弱性の発現・回避のメカニズム

脆弱性の発現パターンに違いがみられるもっとも大きな要因のひとつとしては「脆弱性発現の共有化」がある。とりわけ③への方向付け因子として、津波という脅威によって多くの人々が共通に内包していた脆弱性が同時に発現し、その要因の根底にあった諸問題に対して「解決すべき問題」としての認識を促したことがあげられる。またこれは、問題を共有する当事者同士だけでなく、外部支援団体との認識の「共有化」さえも促進させ、外部との連携を強化する。

この「脆弱性発現の共有化」は、ステークホルダーが大きな鍵を握る。外部アクターからの関心や理解により、平常時から多角的な関係性が構築されていることは、「ソーシャル・キャピタル」としての機能をもつ。これは、人間の安全保障の中で論じられてきた「保護」と「能力開発」という2つの戦略に対し、第3の可能性を示唆する。

#### 5. 結論と今後の展望

本研究で明らかにした脆弱性発現のメカニズムは、従来の貧困削減の概念に対し警鐘を鳴らすと同時に、現在の人間の安全保障にもとづく対応策に新たな一石を投じた。

今後の展望として、目には見えない「脆弱性」を人々が実際にはどのように発現させるのか、その要因がどこにあるのか、という脆弱性発現のメカニズムについてさらに理解を深めることで、人間ひとりが生きる上で何ものにも脅かされることのない社会の方向性を模索していく必要がある。

#### 主要参考文献

- Chambers, R. 1989. "Vulnerability, Coping and Policy" editorial introduction to the special issue on "Vulnerability: How the Poor Cope." *IDS Bulletin*. Vol. 20. No. 2. pp. 1-7.
- Commission on Human Security 2003. *Human Security Now*. New York: Commission on Human Security.
- 「貧困削減と人間の安全保障」研究会 編、2005、『貧困削減と人間の安全保障』、国際協力機構。